

論文の和文要旨	
論文題名	世界文学の中のイタロ・カルヴィーノ ——中国、日本における受容から <b>Italo Calvino nella letteratura mondiale: la ricezione in Cina e in Giappone</b>
氏名	許金菁 (キョキンセイ)
<p>本論文の目的は、中国と日本におけるイタロ・カルヴィーノ (1923-1985) 受容について比較文学的視点から考察することにある。特に、その作品を「世界文学」の文脈に位置づけることを通して、東アジア二国における翻訳・受容の過程を跡づけることにより、作品の越境・移動の実態を検証し、それが世界文学・比較文学の最新理論に照らしていかなる関係にあるかを確認する。</p> <p>本論文は、4つの章から構成されている。</p> <p>第1章 世界文学、過去と現在</p> <p>「世界文学の中のカルヴィーノ」という作家の位置付をめぐる検討に先立って、「世界文学」とは何かについて、今日までに重ねられてきた議論を整理しつつ、「世界文学」の定義とその概念を確認する。</p> <p>「世界文学 (Weltliteratur)」という概念は、1827年ゲーテによって提案された後、マルクスとエンゲルスによる「共産党宣言」において再検討が為される。その後、1891年コロンビア大学における史上初の比較文学部門創設、次いで1954年の国際比較文学学会設立などを経て、「世界文学」をめぐる論議は変化進展を遂げる。以降、アメリカ、フランス、ロシアなどがそれぞれに一派を成しつつ「世界文学」に関する議論が重ねられ、理論的検討が続けられる。その内、本論文では特に、イタリアにおける比較文学的検討を代表する例として、ベネデット・クローチェとレモ・チェゼラーニ、両者の理論を検討した。</p> <p>最後に、今日の世界文学理論の規範及び発展の全体像を掴むべく、四人の世界文学・比較文学の前衛理論家とその代表作を分析する。すなわち、エドワード・サイードによるポスト植民地主義批判である『オリエンタリズム』、フランコ・モレッティの『遠読』、ガヤトリ・スピヴァクによる比較文学批判『ある学問の死』、ディヴィッド・ダムロッシュによる新たな世界文学の概念の提案『世界文学とは何か?』の四作である。</p> <p>第2章 世界文学の中のカルヴィーノ：中国と日本における受容</p> <p>本章では、世界文学の理論とその歴史を概観した後、中国・日本におけるカルヴィーノの作品の受容が提示する問題について検討する。</p> <p>検討は、三つのレベルを設定して行う。</p> <p>第一部においては、カルヴィーノを研究対象として選んだ理由を説明する。つまり作家が国境を越え、世界文学の正統的な位置を占めるに至った原因を分析する。作品がイタリア文学・世界文学にもたらした影響、および作品の翻訳状況を分析した後、文学以外の芸術形式への多様な影響の例を列挙し分析する。その結果、カルヴィーノが国境を越えるだけには留まらず「世界文学」という文脈においてその地位を確立するに至った理由は、カルヴィーノ文学の高次の汎用性および思想の深さにあることを確認する。そしてその作品が現在でも様々な学問や芸術を触発し影響を与え続けている例を明示する。</p>	

第二部では、中国と日本におけるイタリア文化の受容に関する全体的な状況を概観べく、過去100年間における中国と日本のイタリア文化の受容と普及の歴史を検討する。

日本では、幕末末期と明治初期からイタリア文化の受容が開始され、日独伊三国同盟期にその政治的・文化的協力関係に後押しされることによって頂点に達する。その後、第二次世界大戦敗戦に伴い、イタリアへの関心は一時的冷却期をむかえるが、1950年代以降徐々に回復し、1970年代後半以降は、関連出版物も顕著に増加し、さらに1990年代初めからは、イタリア語学習者数の急増もあって、現在に至るまで衰えることなく恒常的に維持されている。

他方、中国におけるイタリア文化受容の歴史は日本とかなり異なる。20世紀におけるイタリア文学作品の中国語翻訳は、一般的に他の西洋諸言語の作品と同様、三期にわたる高揚期を見ることができる。まず初めは、五四愛国運動（1919年5月4日に北京で）により触発された中国新文化・政治時代における外国語文学翻訳の高揚期第一期。次いで、中国の新人民共和国（1949年）から文化大革命運動（1966）に至るまでの間で第二高揚期。しかし、この時期におけるイタリア文学の翻訳は極めて限定的であった。少数のイタリア古典文学作品を除けば、翻訳は共産主義もしくは社会主義リアリズムを有する作品に限られていた。第三期は、中国の開放改革の期間である。この時期文学は政治的・経済的影響を多大に蒙っていたにもかかわらず、イタリア文化の受容と普及・翻訳においては、実に多様でポリフォニックな特徴が見られるようになる。かつて文化大革命の間、一度は中断されていたイタリア語の教育も、1970年代以降再開する。

第三部では、中国と日本におけるカルヴィーノの受容を時系列で検討する。明確かつ分かりやすく示すため、まず日本と中国でのイタロ・カルヴィーノの作品の翻訳者、出版社、出版年代をまとめた一覧表を作成した。また、両国における作家をめぐる批評的言説およびその受容・変容の実態と状況についても詳しく検討した。

### 第3章 王小波と荒川修作：二つの受容のストーリー

本章では、カルヴィーノの受容の具体的な例として、作家と二人の芸術家の比較分析を行った。まずはカルヴィーノと現在の中国における人気作家王小波の比較研究である。この「傷痕文学」（文学大革命が人の魂に残した傷痕を描いた文学）の代表的作家は、カルヴィーノを「師匠」として尊敬し、散文や小説において繰り返しカルヴィーノについて言及している。両者の比較は、幻想文学の選択、アイロニー、文学の軽さの探究、ユートピア思想といった四つの主題に即して行われる。

続いて、荒川修作とカルヴィーノの比較考察に移る。国際的な名声を持つ日本人アーティスト荒川修作は、身体と精神と芸術の繋がりを探ることによって、人類の死の運命を超えることを目指していた。ここでは、カルヴィーノによる荒川の芸術・思想への影響の可能性を中心に、両者の思想の類似点を探求することを目的として、芸術の限界、ユートピア、人類の五感、カルヴィーノの「二元論」と荒川の「一元論」の比較といった四つの観点から検討が為される。

### 第4章 結論

4・1から4.4までは、全勝までに述べた中国と日本でのカルヴィーノの翻訳と普及に関連する分析に基づき、第1章で挙げられた最新の世界文学理論を再考察し分析する。つまり第1章で挙げた四人の理論：サイド、スピヴァク、ダムロッシュとモレットティにつ

いての再検討が行われる。目的は、今日の世界文学の様態、つまり世界文学の実践と理論の対照研究を通して、そこに生じる現れる差異を特定することにある。

その結果、サイードの『オリエンタリズム』、スピヴァクの『ある学問の死』及びモレッティの「遠読」理論は今日の「世界文学」をめぐる研究には限定的にしか適用できないことが判明した。

事実本論文における理論的方向性はダムロッシュの理論に近い。ダムロッシュが定義した「世界文学」は、読みのモードであり、流通のモードである。「世界文学」は翻訳によって豊かになるものであると同時に、諸国民文学が「楕円の屈折」を経たものである。「楕円の屈折」とは、ある作品が一つの焦点からもう一つの焦点に移り、作品が変容し、新たな価値が生成する様相のことで、これを経た諸国民文学が、ダムロッシュの考えた「世界文学」である。つまり、本論文では、カルヴィーノの作品について、起点文学からその目的地までの動態を観察し、その受容・変容もカルヴィーノ文学の一部として考えることにより分析を行った。

4.5と4.6では、カルヴィーノの受容から見た二つの特別な問題を検討した。一つは「ポストモダン」に関する問題である。つまり、中国では常にカルヴィーノがポストモダンを代表する著名な作家としてラベル付けされるのに対し、イタリアではカルヴィーノがけっして「ポストモダン作家」とはみなされないという事実がある。それがカルヴィーノ受容に際して中国が米国の影響を大きく蒙ったことに起因していることを確認する。

もう一つの問題は、中日両国における受容の差異が、カルヴィーノをめぐる批評的言説の発信者に起因することである。その差異が、イタリア研究者によるものか、非イタリア研究者によるものかによって生じていること、両国におけるイタリア研究状況の格差に起因していることを確認する。

最後の章4.7では、本研究の不足点を分析し、将来の展望について述べる。